

## ジェイムズ、西田と現代汎心論

沖永宜司

この発表では、近年再検討されている汎心論的世界像の特徴とその根拠となる議論を吟味し、20世紀前半までの古典的な汎心論哲学と対話させ、お互いに補い合うべき点に迫ってみたい。この中で、ジェイムズや西田の汎心論哲学としての意義を明らかにする。

近代科学は物質を実在と見なし、その客観性と因果的決定性を前提とすることで大きな発展を遂げた。しかしそこで観察主観は客観的物理的世界を外部から眺め操作する問われない領域になっている。これは物理主義的自然主義が根幹に持つ矛盾であり、それは近年複数の学問領域で問題を提起している。またこの矛盾に向き合わないことが、客観的物質の複合から主観的意識が登場する説明を不要にさせてきたとも言える。

こうした問題意識から生じてきた現代の汎心論は、物質をどのように複合したら、心や意識という全く別種の存在様態が生じるのかを説明せよという要求から生じている。この要求が「意識のハードプロブレム」である。それに伴い、脳が因果的に心を産出するという生物学的自然主義の説明、脳という特殊な器官が特殊な方法でそれを担うという説明、いずれは科学がそれを解明するという説明などはいずれも不十分だという認識が広がってきている。

このような問題意識の下、事物の物理的側面に原初から現象的側面が伴うというのが、心の哲学における汎心論に共通した見解になった。他にも現代のシミュレーション宇宙論や量子論などでも汎心論的世界像は広がりつつある。これらの動向をここでは「現代汎心論」と総称する。現代汎心論は現代の科学と矛盾しない。むしろ物理主義や科学的な探求を突き詰めて行くと汎心論に到らざるを得ない論理構造がこれらにおいて共通している。ただし現代汎心論には古典的汎心論に含まれていた主体性、意志、自由、記憶などの扱いにおいて消極的な面がある。これには現代汎心論が物理主義を基本に採用しているという理由があるが、それでも両者の汎心論同士の対話はいまだ不十分なのが現状である。

他方で古典的な哲学についての文献学的な研究では、心を世界の基本的特性として実在論的に捉え直し諸科学との対話を試みる動きが、今世紀に入ってベルクソンの再解釈などで見出される。これは現代的に心の実在をも捉え直す試みであり、こうした潮流と現代汎心論との対話の中に、ジェイムズや西田を汎心論哲学者として読み直す試みを位置づけることができる。

もっとも古典的な哲学の汎心論的な語りは人間の意識内部の分析として、もしくはテキスト世界内の事柄として読み取るべきであり、現代ではそれらの語りは実在論的には扱えないという見解も根強い。しかしこうした「定説」が、現代汎心論などとの対話を経た上でその説を堅持しているとも言いきくい。ジェイムズや西田を汎心論として読み直す試みがこうした対話の一助となることを本発表では目標としたい。